

淀川における川漁師の自然観

伊藤 廣之

要旨 淀川を漁場とする二人の川漁師からの調査にもとづき、漁場である河川や漁獲対象である魚に対する川漁師の自然観を追求した。河川に対する自然観としては、魚のよくとれる漁場を「米櫃」と捉える自然観が存在し、しかもその自然観が淀川だけではなく、荒川のほか、海の漁撈においても認められることを指摘した。また漁場の占有と秘匿の慣行をめぐって漁場を媒介とする「人と人の関係性」にオモテとウラの二面的なあり方があることを指摘した。さらに魚に対する自然観としては、淀川の川漁師の「魚のことは魚に聞け」ということばを手がかりにして、自然と人を対立的にとらえるのではなく、並立的に捉えようとする自然観が淀川の川漁師のあいだに存在し、それが利根川・長良川・木曾川など広い範囲の川漁師にも共通して認められることを明らかにした。

はじめに

生産に関する生業活動を研究対象とするとき、社会経済的な視点だけではなく、自然に対する人間の側からの働きかけとして捉える視点が存在する。従来の民俗学における生産に関する生業研究は、「技術」に関する側面を中心とする人間からの自然への働きかけを捉えようとしてきた。しかし、生業活動における自然と人間の関わりは、技術の側面だけに止まるものではない。たとえば、働きかけの結果として、主体である人間の側に形成される自然に対する認識・観念といった問題が、研究課題として浮かび

上がってくるのである。これは生業活動をとおして形成された「自然観」の問題といえる⁽¹⁾。

民俗学の立場から自然と人間の関係を見ていくうえで、哲学者・内山節の自然のとらえ方は、たいへん興味深いものがある。内山節は「人間によって認識された自然の世界には二つの面がある」と指摘する。ひとつの面は「人間の外に存在している客観的な体系としての自然」であり、もうひとつの面は「人間の主体とのかかわりのなかでみえてくる自然」〔内山 一九八八 九頁〕である。この二つの自然は、前者が自然科学が分析の対象とする自然であるとすれば、後者はおもに人文科学や社会科学が考察

の対象とする自然であるといえよう。

本稿では、内山節が指摘する後者の自然、つまり「人間の主体とのかかわりのなかでみえてくる自然」を対象として定め、環境民俗学の立場から淀川の川漁師の目を通して見えてくる自然について考察していくことにしたい。その場合、まず漁撈活動の主体としての川漁師にとっての自然とは具体的には何を指しているのか、という点を明確にしておかなければならないであろう。ここでは、川漁師にとっての自然とは、ひとつには漁撈活動の場である河川であり、もうひとつは漁撈活動の対象である魚介と規定しておきたい。

そのうえで、本稿では、具体的な漁撈活動をとおして川漁師にとっての自然について考察していきたい。そのなかで、川漁師の「漁撈観」や「自然観」といったものを見ていくことになるが、こうしたテーマは、従来の民俗学における河川漁撈の研究では、未開拓の領域であった。

以下、このテーマを検討するにあたって、すでに発表してきた淀川での河川漁撈の事例にもとづきながら、まず川漁師が河川や魚のどのような点に対して関心をいだいて漁撈活動を展開しているのか、川漁師の側に立ちながら考察していくことにしたい。そのための第一歩として、まず河川漁撈がどのような感覚のもとでおこなわれていたのか、川漁師の漁撈に対する考え方、ことばを換えていえば「漁撈観」ともいべきものを明らかにしておきたい。

一 アミウチにおける魚の居場所と動き

川漁師の漁撈観

まず川漁のイメージをつかむことから始めたい。ここでは川漁師Mさんの事例（伊藤 一九九四）を手がかりにして見てみよう。Mさんは淀川でのアミウチ（投網漁）を中心にしながら淀川の淡水域での漁撈の経験が豊富な川漁師であった。

アミウチには、船に乗って船上から網を打つ「船打ち」と、岸に立って網を打つ「陸打ち」とがあった。Mさんがおこなっていたのは船打ちであった。Mさんはアミウチに出掛けるとき、いったん船で淀川の上流まで上っていき、そこから川の流れてそって下流へと下りながら、網を打っていった。アミウチは魚のいそうなポイントを選んで網を打っていくが、そのとき、かならずしも、上流から順番に網を打っていくわけではない。アミウチには、ひとつの戦略があったのである。

アミウチでは、前回の漁で魚がとれなかったポイントは後回しとした。すなわち、前回、魚がとれたポイントを先に回っていくのが原則であった。Mさんのことばを借りていうと、「それ（川漁）でメシを食っている者は、それ（魚）をとらないとメシが食えない。とれなければ、とれるところまでいって魚をとる。夜通しでも魚をとりにいく。『ここでアブレたら、アコにいったらおるなあ』と、つきつきに頭に入ってくる」という。このように、アミウチに際して、川漁師は川筋のなかに点在するいくつもの漁のポイントのなかから、確実に多くの魚がとれそうなところを最優先に回り、網を打っていったのである。

このように、川漁師は漁撈活動の場としての河川に対して、効率よく魚

をとるために、川筋のなかにいくつものポイントとなる場所、つまり確実に魚のとれる場所を把握し、しかもそれぞれのポイントの過去の漁獲実績をふまえながら、網を打っていくのである。そして、とれなければとれるところまでいって、魚をとるのである。こうした点に、河川漁撈によって生計を立ててきた川漁師の漁撈に対する姿勢や考え方、つまり「漁撈観」というべきものが表れているといえるのである。

つぎに川漁師にとつての自然のひとつとして、漁撈の対象である魚に焦点を当て、川漁師がどのような視点から魚を見ていたのかについて検討してみよう。

魚の居場所と動き

Mさんのアミウチのあり方を見てみると、川漁師の関心のひとつが「魚の居場所」に向けられていたことが浮かび上がってくる。そこで、川漁師が認識している魚の居場所というのは、どのようなところなのであろうか。ふたたびMさんの話にもどってみよう。

Mさんによれば、淀川の川筋において、魚の居場所として目安になるところは、セシタとヨコアナであった。セシタとは、「瀬」の少し下流のところをさし、そこは川底が段状に深く落ち込んだ状態になっていた。いわゆる「淵」にあたるところである。川漁師によれば、普段はセシタには魚はいないとされる。そのため、アミウチに際しては、セシタから下流に二間ほど下ったところを目安にして網を打っていく。ただし、冬になると、セシタにコイが黒くなるほど群がっていることがある。そんなときには、セシタでアミウチをおこなった。

いっぽう、冬場の川漁では、ヨコアナが重要な漁のポイントであった。

ヨコアナというのは、川岸の土手の一部が内側に穴の空いた状態になっているところである。ヨコアナは、どこにでもあるわけではない。土手が粘土質の土になっていて、それが急激に水面に落ち込んでいるようなところにある。川漁師の考えでは、ヨコアナは、コイやフナが土手の土をつついて空けた穴だとされ、冬場になると、コイやフナがヨコアナに集まってくる」とされる。川漁師はヨコアナに集まった魚を、カスミ網によって一気に捕獲するのである。このように、セシタとヨコアナは、アミウチやカスミ網漁に際して、対象となる魚の居場所として認識されていたのである。

魚に対して向けられていた川漁師の視点として、もうひとつ浮かび上がってくるのが、「魚の動き」である。川漁師の「魚の動き」に対する関心は、どのようなものであったのか、水中で動き回る魚を、アミウチによってとる場合について見てみよう。たとえば、Mさんは、魚の動きを見る場合に大切になってくるのは水の流れだという。すなわち、「普段、水の流れがゆっくりしているところでも、水は互いに動いている」。「水と水が当たっているとところのシモにはかならず魚が続いている」とされる。このように、川漁師は水の流れを観察することによって魚の動きを予測し、アミウチをおこなっていたのである。

アミウチには、あらかじめ餌を川のなかに撒いておき、おびき寄せた魚をねらって網を打つエウチという方法もあった。Mさんによると、川のなかには魚が上ってくる道があるとされる。また上ってきた魚が遊ぶ場所があると認識されていた。そうした場所のなかから、網を打っても引つかからないようなところをあらかじめ選んでおき、そこに餌を撒いて魚をおびき寄せるのである。魚は種類がおなじでも、大きさによって餌を食べにくる時刻が異なるとされる。具体的には、小さなフナは夕方に、大きなフナ

やコイは夜遅くに餌を食べるとされる。エウチはそうした魚の行動習性をふまえた漁法であった。

もうひとつ魚の動きにあわせたアミウチの事例を見ておこう。それは石垣でできた川岸のもっとも深いところに潜んでいるコイをとろうとする場合である。そんなときは、石垣の地上部分を大きな石で強くたたきという。そうすると、振動に驚いて石垣に潜んでいたコイが飛び出してくる。それをめがけて投網を打つのである。石垣から驚いて出てくるとき、コイは必ず泡を吹き出す習性があるとされる。これを川漁師は「コイのフキ」と呼び、「コイのフキ」を確認して、その少し先の方をめがけて投網を打つのである。こうした方法も、魚の動きをふまえたアミウチの方法のひとつといえる。

以上からもわかるように、アミウチは、水中を移動する魚を対象とする漁法であったため、川漁師の魚に対する関心は、つねに魚の居場所と魚の動きに向けられていたのである。

二 ウナギ漁における汽水の塩分濃度と魚の動き

汽水域でのウナギ漁においても、魚の動きの把握は漁の成否を左右する重要なものと認識されており、その魚の動きを規定する汽水域の塩分濃度に対して、つねに高い関心が払われていたのである。ここではAさんの漁撈活動を事例〔伊藤 二〇〇九〕として、汽水でのウナギ漁における塩分濃度の変化と魚の動きについて見てみよう。

Aさんは大阪市淀川区十三の地先の汽水域で、シバヤツツなどの小型定置漁具を使い分けながらウナギ漁をおこなっていた。シバは櫂の枝を束ね

たもので、これを水中に浸けておくと、シバにウナギが潜り込んでくる習性がある。そうしたウナギの習性を利用したのがシバツケ漁であった。もう一方のツツは、マダケの節を抜いたもので、二〜三本を一束にして親網につないで川底に沈めておくと、ウナギが住処と思って竹筒のなかに入ってくる。川底に沈めたツツをゆっくりと引き上げ、ツツに入ったウナギをタモアミですくいとるのがツツ漁であった。

Aさんによれば、汽水域でのウナギ漁を左右するのは、川の塩分濃度であると認識されていた。具体的には、汽水域の塩分濃度が高くなると、ウナギは苦しくなると、塩分濃度の低い水面の方へと移動してくるといっている。逆に塩分濃度が低いときには、ウナギは川底の方へと移動すると考えられている。したがって、川の塩分濃度が高いときには、水中に吊り下げたシバに寄りつきやすく、塩分濃度が低いときには、川底に沈めたツツにウナギが入りやすいとされていたのである。

川の塩分濃度を左右していたものは何か。Aさんによれば、十三付近の汽水域において、塩分濃度は三つの要素の組み合わせによって変わってくると考えられていた。三つの要素とは、風向、潮の干満、可動堰の開閉であった。風向と潮の干満は自然の要素である。風向に関しては、十三近辺で東風あるいは北風が吹くと、汽水域の塩分濃度が高くなるとされていた。これに対して、西風のときには塩分濃度が低くなるとされていた。これは水面の風の向きに対して逆方向の水の流れが発生することに起因する自然現象である。淀川河口は南西に向いて流れており、そのため東風や北風のときに海から塩水が入り込みやすくなるのであった。

もうひとつ、塩分濃度を左右する自然の要素として潮の干満があった。まず満潮のときは、河口から海水が入ってくるため川の塩分濃度が高くな

る。逆に干潮のときは、海水の流入が無くなるため、川の塩分濃度は低くなるのであった。三つめの要素は可動堰の開閉である。これは人工的な要素である。可動堰が開いているときは、上流から淡水が流れ込んでくるため、可動堰下流の汽水の塩分濃度は低くなる。いっぽう、堰が閉じられているときは、淡水の供給が無くなるため、逆に汽水の塩分濃度が高くなるのであった。

十三の地先の汽水域でのウナギ漁においては、このような塩分濃度の変化とウナギの習性をふまえながら、風向や潮の干満を把握し、また可動堰の開閉を考慮しつつ、翌日の漁場の塩分濃度を予測し、その塩分濃度をふまえて、水中のシバの高さをウナギが潜り込みやすい位置に調整していたのであった。またシバツケ漁でウナギがとれないときには、ツツ漁に切り替えるなど、効率よく確実にウナギをとるために、その日の汽水域での塩分濃度や季節によって、漁具・漁法を使い分けてウナギ漁をおこなっていたのである。

このように、汽水域でのウナギ漁では、自然的要因や人工的要因の観察をとおして日々の塩分濃度の変化を察知し、塩分濃度の変化にともない居場所を変えるウナギの動きを予測しながら漁がおこなわれていたのである。そのため、川漁師の関心は、塩分濃度を左右するとされる風向、潮の干満、可動堰の開閉などに向けられていたのである。

ここまでアミウチやシバツケなど、それぞれ異なった漁撈に注目し、ふたりの川漁師の漁撈活動を振り返りながら、魚に対する関心のあり方をみてきた。彼らの関心は、漁撈対象や漁撈環境の違いから、それぞれ異なるものに対して向けられていたものの、大きく括ると、漁獲対象である「魚の動き」に対して関心が注がれていたという点で共通していたといえる。

以上、ここまで見てきたことをまとめると、川漁師は漁獲対象としての魚について、それがどこにいいのか、どのような動きをするのか、つまり「魚の居場所」と「魚の動き」という視点で捉えていたことがわかる。さらに「魚の居場所」と「魚の動き」は、セシタやヨコアナといった河川の地形や水の流れ、また風向や潮の干満、さらに可動堰の開閉など、さまざまな自然的要素や人工的要素との関わりにおいて捉えられていたことが明らかとなったといえる。

三 漁場の秘匿と占有

自然を相手に漁撈活動を展開する川漁師にとって、もうひとつの大きな関心事は川漁をおこなう「場所」であった。漁撈活動をおこなう場所によって漁獲が大きく左右されるからである。そのため、川漁師にとって、いかにして良い漁場を確保するかということが重要な関心事となってくるのである。前稿〔伊藤 二〇一一〕では、漁場をめぐる占有慣行とその背景にある原理について検討してきたが、ここでは漁場という空間において展開される川漁師と川漁師の関係性、つまり漁場を媒介とした「人と人の関係性」という切り口から見ていくことにしたい。

川漁師は漁場とする河川のなかに、いくつものポイントとなる場所をもっていた。Mさんの漁撈活動を事例として見ていくと、彼は淀川の川筋のなかに、セシタとかヨコアナと呼ぶ漁のポイントとなる場所を把握していたのである。そうした場所は、川漁師にとって大切な漁場であったため、他の川漁師はいうまでもなく、親子のあいだでさえも秘密にされていたという。たとえば、Mさんによれば、彼の父親が漁をおこなっていたころ、

「父親であっても息子に対して、どこにセシタやヨコアナがあるのか、しゃべらなかつた」。つまり、セシタとかヨコアナといった確実に魚がとれる場所は、それぞれの川漁師ごとに秘密にされていたのであった。つまり、競合する他の川漁師に対して、漁場を秘密にすることにより、自己の漁の安定化をはかってきたのであった。

なおヨコアナに関しては、他の川漁師のヨコアナを見つけだし、本人にみつからないよう、こっそりと漁をおこなうということもおこなわれていた。これは漁場を盗むという行為である。たとえば、他の川漁師のヨコアナの所在を知ろうとするときは、その川漁師が夜に漁にでかけたときを見計らい、使っている漁具の種類を盗み見ているとわかるとされる。カスミ網を張り、魚を追っているのであれば、そこにはヨコアナがあるということになるのである。

そのようにして見つけたヨコアナへ漁に出かけていると、偶然にも相手の川漁師とかち合うこともあった。そうしたときは、その場所を共同の漁場とする約束を取り交わし、つきからはふたりの川漁師が合同で漁をおこなうことになっていた。このように秘密の漁場は、つねに他の川漁師から盗まれる可能性を秘めていた。したがって、普段から川漁師は、そうした漁場を他の川漁師に見つからないように細心の注意を払っていたのである。

いっぽう、漁場をめぐることは、所在を秘密にするのではなく、そこに竿や杭をたてることによって、その漁場に占有者が存在することを表示するというやり方があった。竿や杭による漁場の占有表示については、Mさん・Aさんふたりの川漁師から共通して聞くことができた。この方法は漁師間の社会的承認にもとづくものであり、とくにモンドリとシバなどの定置漁具をもちいた漁撈の場合におこなわれていた。

たとえば、Mさんによれば、護岸工事などで新しく石が積まれたようなところは、ウナギにとって格好の住処となった。そうした場所をみつけたときは、他の川漁師よりもさきとその場所にいつて竿を立て、ロープを流し、餌も入れずにモンドリだけを仕掛け、まず漁場の確保をおこなった。他の川漁師よりもさきにモンドリを仕掛けることが、漁場を占有するためには重要な意味をもつと考えられていたのである。

これと関連した話はAさんから聞くことができた。彼は一九六〇年のなかごろ、淀川の水質汚濁によって淀川中流での漁が不振となり、可動堰下流の汽水域に移ってきた。そのころを振り返り、彼はつぎのようにいう。十三では「みんな杭を立ててシバを仕掛けていた。それがナワバリみたいになっていた。他の漁師が杭を立てているところでは、おなじ仲間内なのでそこで漁をすることはしなかつた」という。このように、定置漁具をもちいた河川漁撈においては、漁具を固定するために打ち込まれた竿や杭が、漁場の占有を表示するものとして、川漁師のあいだで相互に認められており、その背景には、漁場の先占権を互いに認め、侵害しないという考え方があったのである。

以上、検討してきたことをまとめると、漁場という空間における「人と人の関係性」は二つの側面があった。ひとつは定置漁具による漁撈において、占有慣行のもつて、他の川漁師の先占権を認め、互いの漁撈活動の安定を図ろうとする関係性である。もうひとつは、顕在化しない秘密の漁場での漁撈において、他の川漁師が秘密にしている漁場を見つけて盗むという関係性である。このように、漁場をめぐる「人と人の関係性」には、オモテでは占有慣行を遵守しながら、ウラでは他の川漁師の漁場を盗むという、二面的なあり方が形づくられていたといえる。

四 河川・漁場に対する自然観

川漁師は漁撈を通じて価値を見いだした自然に対して、ある種の意味づけをおこなっていた。この自然に対する意味づけが「自然観」である。川漁師が価値を見いだした自然とは、これまで見てきたように、ひとつは漁撈活動の舞台である河川（漁場）であり、もうひとつは漁撈の対象である魚である。ここでは、川漁師の河川（漁場）に対する自然観について見ていくことにしたい。

淀川では、モンドリやシバといった小型の定置漁具を使った川漁のほか、大がかりな定置漁具による川漁もおこなわれていた。それは増水時に下流から上ってくるウナギなどの魚をとるためのもので、Mさんの家ではその川漁をおこなうことを「上りをかける」と呼んでいた。これは川岸とヨシ島とのあいだに簀を建て、岸沿いに上ってくるウナギなどの群れを大型の袋網へと誘い込む仕掛けである。Mさんの家では、自宅近くの淀川左岸に「上りをかける」ための漁場を確保しており、ここから上流・下流の何百メートルかの範囲には、他の川漁師を近寄せないよう日常的に警戒していたのである。

普段はその漁場では魚はとらないが、いったん淀川が増水すると、下流からウナギなどの魚が群がって岸沿いに上ってくるため、かなりの漁獲があった。かつて一回の増水時の水揚げで、親子そろって漁船を新調したこともあったという。Mさんの家ではこうした「上りをかける」漁場のことを「ウチのゲブツ（米櫃）だ」と呼んでいた。ゲブツというのは、ゲビツの訛りで、大阪や堺などで「米櫃」を意味することばである〔牧村 一九八四 二二二〕。つまり「ウチのゲブツだ」というのは、言い換えると、

それは「私の家の米櫃だ」という意味である。米櫃は「精米した米を入れておくひつ」を指すが、「生活費を供給する者」または「稼ぎ手」という意味合いも含まれている⁽³⁾。突発的ではあるが、大量に漁獲のある大きな漁場を米櫃とする捉え方には、河川漁撈を生業としてきた川漁師ならではの河川に対する自然観が表されていると見ることができるところで、魚のよくとれる漁場を米櫃と呼ぶ捉え方は、実は淀川以外の河川においても確認されている。たとえば、前稿〔伊藤 二〇一一〕でも述べたように、関東平野を流れる荒川の中流域にあたる戸田市の川漁師にも、同様の事例がある。埼玉県戸田市の川漁師は、漁場となる川筋の一角に「とって置ききのツボ」を持っていて、普段はそこで漁をしないが、特別の支出が生じたときに出漁した。川漁師はその「とって置ききのツボ」を「米櫃」とよび、その漁場にでかけることを、「米櫃を開けてくる」と呼んでいた。「何時、如何なるときでも、そこへ行きさえすれば、相当な漁獲がみられ、一家の危急を救うということが、しばしばだった」という〔小林 一九七六 一一〕。

淀川の川漁師が語っていたゲブツとよぶ漁場は、増水時に簀建てをおこなう場所であったが、戸田市の川漁師が米櫃と呼ぶ場所は、刺し網で魚をとる秘密の漁場となっていたところをさす。両者は漁場の性格が異なるものの、河川のなかのとって置ききの漁場である点では共通しており、これらは川漁師に共通した河川（漁場）に対する自然観を表すものであったといえる。なお小林茂は、荒川の長瀬の対岸の下田野耕地で、農業と川漁によつて生計を営んできた人が、「荒川は財布だ」と語っていたとの報告をしている〔小林 二〇〇七 七〕。川を財布とする捉え方は、漁場を米櫃とする捉え方と共通したものといつてよいであろう。

河川漁撈において、こうした漁場が存在することは、今のところ淀川と荒川で確認されているだけであるが、それは海で漁撈をおこなう人びとにおいても確認することができる。たとえば、類似の事例としては、舩倉島、粟島、熊野市二木島の三例がある。舩倉島では潜水漁撈に従事する海女のあいだで、一軒の家ごとに二〜三カ所の秘密の漁場を持っていた。それは親から受け継いだものや、自分で発見したものであったが、そうした秘密の漁場が「米櫃」と呼ばれていた。「その場所に行けば必ず米飯が食べられる」という意味から出た言葉」とされる〔小林 一九七五 二八〕。

新潟県村上市の沖合にある粟島では、冬期にミズダコを対象としたタコアナ漁がおこなわれた。タコアナ漁は岩場の穴に隠れたミズダコをヤスを使ってとる漁で、粟島の内浦では村穴・仲間穴・ゼンバコ（銭箱）の三種のタコアナがあった。ゼンバコは村や仲間で共有するタコアナではなく、その所在場所を秘密にした個人で用益するタコアナであった〔金子 一九六〇 三四〕。

そのほか、熊野市二木島でも同様の事例が報告されている。野本寛一によれば、「漁師は誰でも他人に知られたくない好漁場を持って」おり、二木島では「そうした個人が秘密とする漁場のことを『台所場所』『米蔵』と呼ぶ。そこで獲った魚で生活費を得るとい意味」だという〔野本 一九九一 二〇四〕。

このように、海の漁撈においても、「米櫃」・「銭箱」・「台所場所」・「米蔵」と呼ばれる場所があり、それらは漁獲の良好な漁場をさすものであった。河川漁撈において見られる、とって置ききの漁場を「米櫃」とする捉え方は、海の漁撈においても類似したものがあり、こうした捉え方は、漁撈に従事する人たちに共通した、漁場に対する自然観を物語るもので

あったといえる。

五 魚に対する自然観

ここでは、川漁師が漁撈を通して関わる自然のうち、漁獲対象である魚に対する川漁師の自然観について探ってみよう。

Mさんが父親からアミウチについて習いはじめたころのことである。彼はどこに網を打ったらよいのかわからなかった。そこで父親によく「魚はどんなところにいるのか」と尋ねたことがあった。しかし父親の返事は、ただ「ジャコの場合はジャコに聞け」というだけで、それ以上のことは教えてもらえなかった。ここでいう「ジャコ」とは魚一般をさすことばと考えてよいであろう。つまりMさんが父親からいわれたのは、「魚のことは魚に聞け」ということであった。その当時、Mさんはそのことばの意味を理解することができなかった。何も教えてくれない父親に対して、Mさんは反感すら覚えることがあったという。

しかし、Mさんは大きくなってから、そのことばの意味がわかるようになった。父親がいつていたことが、そのとおりでと思えるようになったという。Mさんは「ジャコの場合はジャコに聞け」ということばの意味を、つぎのように理解している。すなわち、アミウチはつねに動きまわる魚を対象とする。今日そこに魚がいたとしても、明日同じところにいるとはかぎらない。したがって、アミウチでは、魚の行動の習性を熟知しておくことが必要となる。しかし、それは知識として教えられてもわかるようなものではない。「小さい魚はどこにいるのか。大きな魚はどこにいるのか。それもやっぱり魚に聞かなければわからない。それもひとつの経験であ

る」という。つまり、魚の行動に関する知識は、実際の漁撈をとおして経験的に身に備わっていくというわけである。「ジャコ」のことはジャコに聞け」とは、経験をとおして知ることの大切さを説いたことばだと、Mさんは理解しているのである。

この「ジャコ」のことはジャコに聞け」ということばには、自然と向き合って生きてきた川漁師の魚に対する接し方が表現されている。すなわち、川漁師の魚に対する接し方とは、魚を単なる捕獲対象として捉えるのではなく、魚を意思をもったひとつの生き物と見なし、川漁師が川にいる魚になつたつもりで、魚の行動を捉えていかなければならないとする考え方である。つまりそれは、魚と川漁師を対立的に捉えるのではなく、並立した位置関係にあるものとしたうえで、川漁師（人）の視線を自然の側に合わせて捉えようとする考え方である。そうした自然観が「ジャコ」のことはジャコに聞け」ということばによって、象徴的に表されていたのである。

さてこれまで、淀川の川漁師の事例にもとづき、漁獲対象としての魚をめぐる自然観を見てきたが、そうした川漁師の自然観は、淀川の川漁師に限ったものではなかった。淀川以外の河川の川漁師においても見いだすことができる。

たとえば、「ジャコに聞け」ということばであるが、これとほぼおなじ意味のことばを長良川の釣り漁師が語っている。長良川の上流の郡上市で「川の渡世人」を自称する古田萬吉さんは、おもにアマゴとアユをとり、冬場にはコイやシラハエを釣る川漁師であった。アユは川のなかの石に生えるコケを餌とする。彼によれば、アユは一日のなかでも、もっともコケがおいしい時刻に餌を食べるといふ。それが一般に「食み刻」とよばれるものである。その「食み刻」を知るコツは「その地の川漁師に聞いてもえ

えが、一番ええんはな、アユに聞くことやな」と語る。長良川の釣り漁師が語る「アユにきく」と淀川の川漁師がいう「魚に聞く」とはおなじ自然観を反映したものといえる。

さらに同じような内容は、長良川下流の川漁師も語っている。長良川下流で川漁をおこなってきた川漁師の大橋修さんは、「魚が答えを全部教えてくれている。だから魚の気持ちになって考えろ」〔大橋・大橋・磯貝 二〇一〇 三七一〕と語る。ここで語られている内容も、これまで見てきた「魚に聞け」と同様のことを意味していると考えてよいであろう。

また利根川で屋形船を飯の住まいとしながら一年中、川漁をおこなってきた川漁師も同様の話をしている。ウナギのシノギヅリ漁の漁場は、「洲の上がいいとか、洲下がいいとか、キレツポのきわがいいとか、そういうことは、つまり『魚にきけ』ということなんだ。人にきいて、なるほどと思っても、魚がつかれるわけじゃない。この前も長なわ（はえなわ）のやり方を霞ヶ浦の漁師からきいてきた人が」あったが、「それを利根川でやってもダメだよ。利根川のことばは、利根川の魚にきかなくちゃあ、わかんないよ」〔菅原 一九九七 三五五〕と語る。利根川の川漁師にも、淀川や長良川の川漁師と共通した魚に対する認識があったことがわかる。このように見てくると、漁獲対象である魚に対する川漁師の自然観には、地域を越えて共通したものがあつたと考えることができる。それは自然と人を対立的に捉える自然観ではなく、並立した関係のなかで捉えようとする自然観であつたのである。

まとめ

本稿では、河川や魚に関する「自然と人の関係性」、漁場を媒介とした「人と人の関係性」という二つの視点から淀川の川漁師の漁撈活動を分析し、川漁師の自然に対する捉え方や接し方を見てきた。まず川漁師にとつての「自然と人の関係性」に関して、漁撈の対象としての魚介という要素には、魚介の居場所と動きに関連するさまざまな要素が結びついていることを見た。具体的には、河川の地形や水の流れ、風向や潮の干満といった要素とつながっていることが明らかとなった。もういっぽうの河川・漁場という要素には、漁撈のうえで互いに競い合ってきた他の川漁師の存在が結びついていることが明らかとなった。つまり、魚介と漁場（河川）というふたつの要素を核としつつ、川漁師は前者の要素をとおして自然と結びつき（「自然と人の関係性」）、後者の要素をとおして漁師仲間との社会的関係（環境を媒介とした「人と人の関係性」）を構築していたという構図が浮かび上がった。

そのなかで、「自然と人の関係性」に関わっては、二つの点を指摘した。ひとつは、漁場に関して、必要なときに確実に魚が得られる漁場を「米櫃」と呼ぶことについて検討を加え、そうした捉え方には、河川を舞台に川漁を生業としてきた川漁師ならではの独特の自然観が表されていること、しかもその自然観は川漁師に止まらず、一部の海の漁師にも共通して見られることを指摘した。もうひとつは、魚と人の関係性に関して、「魚のことは魚に聞け」という川漁師のことに注目し、そこに自然と人を対立的に捉えるのではなく、並立した対等な関係のなかで捉えようとする自然観が潜んでいることを指摘した。

また漁場を媒介とした「人と人の関係性」に関わって、二つの点を指摘した。ひとつはモンドリなどの定置漁具による漁撈において、漁場の占有をめぐって、他の川漁師の先占権を認め、川漁師の仲間のなかで互いの漁撈活動を侵害しないという関係性である。もうひとつは、秘密の漁場での漁撈をめぐって、他の川漁師が秘密にしている漁場を見つけ出して盗むという関係性である。さらに、こうした漁場用益のあり方に関して、オモテでは互いに占有慣行を尊重しながら、ウラでは他の川漁師の漁場を盗むという、漁場をめぐる「人と人の関係性」に二面的なあり方が存在することを指摘した。

注

(1) 千葉徳爾は「日本人の自然観」において、「自然観を自然に対する人びとの見方、考え方」と規定し、そのうえで「同一の自然に対しても、人によって見方、考え方は異なる」が、従来の多くの議論はこの問題を素通りしている」と指摘している（千葉 一九八〇 四〇）。本稿では、自然観の主体を明確にし、現代の川漁師の自然観について論じるものとする。

(2) 漁師による漁場を盗むという行為について、高桑守史は海女の世界を例にしながら、「漁民が経験を通して獲得してきた好漁場や好漁礁は、他の漁民には秘密にされる」が、漁場をめぐって「ときには、騙しや嘘あるいは盗みなど、農社会における倫理からすれば大きく逸脱すると考えられる行為として表出することもある」（高桑 一九八九 一三二）とし、その背景に漁民気質として高い競争意識があることを指摘している。淀川での秘密の漁場をめぐる川漁師の駆け引きの根底には、海の漁師と共通した競争意識があることをうかがわせる。

(3) 『日本国語大辞典』（縮刷版第一版、小学館）の「こめびつ」の項による。

参考文献

- 菅原修二 一九九七 『川魚図志(増補改訂新版)』 崑書房
- 天野礼子 一九九〇 『萬草と長良川』 筑摩書房
- 伊藤廣之 一九九四 『淀川中流における川漁師の漁撈活動』 原泰根編 『民俗の
ところを探る』 初芝文庫
- 伊藤廣之 二〇〇九 『淀川における川漁師の漁撈活動』 『近畿民俗』 第一七七号、
近畿民俗学会
- 伊藤廣之 二〇一一 『河川漁撈における川漁師の漁場をめぐる慣習と資源利用
― 漁場の個人占有と秘匿をめぐる ―』 『大阪歴史博物館研究紀要』 第九号、大
阪歴史博物館
- 内山 節 一九八八 『自然と人間の哲学』 岩波書店
- 大橋亮一・大橋修・磯貝政司 二〇一〇 『長良川漁師口伝』 人間社
- 金子 忠 一九六〇 『粟島の蛸穴』 『民間伝承』 二四卷七号、六人社
- 小林 茂 一九七六 『戸田市の伝統漁法(補)』 戸田市教育委員会
- 小林 茂 二〇〇七 『内水面漁撈の民具学』 言叢社
- 小林忠雄 一九七五 『生業・交易』 『海士町・舩倉島―奥能登外浦民俗資料緊急
調査報告書―』 石川県立郷土資料館
- 高桑守史 一九八九 『海の世界』 鳥越皓之編 『民俗学を学ぶ人のために』 世界
思想社
- 千葉徳爾 一九八〇 『日本人の自然観』 『土木工学大系 四 自然環境論(Ⅲ) 人
文社会と開発保全』 彰国社
- 野本寛一 一九九一 『有明海生活誌―倉本幸翁の半生から―』 『民俗文化』 三、
近畿大学民俗学研究所
- 牧村史陽編 一九八四 『大阪ことば事典』 (講談社学術文庫六五八) 講談社

本稿は「淀川の川漁師からみた自然」(鳥越皓之編『試みとしての環境民俗学―琵琶湖のフィールドから』雄山閣出版、一九九四年)をもとにしながら、新たに得られた知見をふまえ、結論部分を含めて大幅に加筆修正したものである。

River–fishers’ perception of nature in the Yodogawa River

ITO Hiroyuki

In this paper, the author reveals how nature and the environment are seen by river–fishers, who are actors in subsistence activities (i.e., fishing activities), by analyzing the fishing activities of river–fishers in the Yodogawa River and specific fishery operations. First, the author reveals that river–fishers are interested in fish (i.e., target fish species) and fishing grounds (i.e., areas used for fishing activities), based on analyses of fishing activities and specific fishery operations by river–fishers.

The author then reviews underlying factors that are related to fish and fishing grounds, points out that there are two factors regarding fish (i.e., fish habitats and fish migration), and reveals that these factors are affected by natural factors such as river terrain, water flow, wind direction, and tidal ebb and flow. The author points out that factors related to fishing grounds involve other river–fishers who are rivals in fishery.

In terms of fishers’ attitude toward nature (i.e., fish), the author focuses on the phrase “ask the fish if you want to know about fish”. The author points out that the phrase reflects fishers’ attitude toward nature, that is, people should treat nature as an equal partner. In terms of fishers’ attitude toward the environment in connection with fishing grounds, the author also focuses on the fact that fishers call fishing grounds “rice chest”. The author points out that the expression reflects fishers’ perception of fishing grounds as the foundation that supports their families’ lives.